

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 2 年次生 濱本 貴子

1. はじめに

この度、国際交流基金の助成を受けて平成28年3月1日から3月25日まで提携大学であるタイのシーナカリンウィロート大学に留学生として訪問したので報告致します。滞在中の平日の朝から夕方にかけては、現地の学生と授業・実験・実習・訪問活動に参加するか自身のプロジェクトを行い、休日は都市部にある学生の家ホームステイし、周辺を観光し、海外の医療だけでなく異文化に触れる事が出来ました。

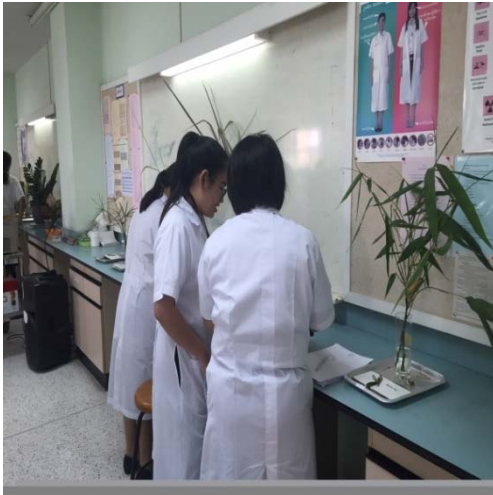
2. シーナカリンウィロート大学

タイのバンコクに本部を置く国立大学で、今回訪れた薬学部は本キャンパスから2時間程の所に位置するオンカラック郡にありました。

学部プログラムの専攻は当校と同じく **pharmaceutical care** と **pharmaceutical science** ですが、両コースとも6年生で国家試験を受ける事が出来るという違いがありました。また入学時にコースを選択しなければならず、多くの学生が **pharmaceutical science** を選択していました。

3. 授業

留学という言葉から思い浮かぶように、留学生だけがたくさん集まり彼らだけで授業を受けたりアクティビティをしたりするのではなく、大阪薬科大学からの留学生として現地の学生と行動が共にできるようにオリジナルのプログラムを組んでくださいました。そのため、もちろん授業や実験の説明は全てタイ語で行われるのですが、学生が横で同時に英語に翻訳してくれたり、教授がタイ語で説明を終えた後、英語で再び説明してくれたりしたので、学生と同じように参加し楽しむことができました。授業を受けるより実験(本学でいう実習)のほうが多く、その中でも特に植物実習は印象的でした。事前に講義を受け特徴を覚えた植物を同定するという内容ですが、同定の仕方にすごく興味が沸きました。まず植物の生え方、葉脈の流れや付き方を、その後花や額の有無、そして匂いを確認します。時には用意されているナイフで実や茎を切ることで植物を確認しました。そして、口に入れても問題ない植物に関しては口に含んでみて、その苦味や甘味を実際に味わってみることも出来ました。化学薬品や有機物を使った実習ではもちろんこのようにいきませんが、“実習をしている”という事を強く実感しながら行えたという意味で、とても面白いものでした。



4. 訪問活動

何らかの理由で病院に行けない人達の自宅へ薬や食料品を持って行き、服薬指導や身体に異変がないかの診断、生活指導を行う活動です。何らかの理由というのは、お金がない・郊外に住んでいるため行く手段がないといった理由の他、対人恐怖症のためというものもありました。タイは、他の発展途上国の中でも富裕層と貧困層の格差が突出していて、訪問活動で訪れるのは後者に属する人達が住む自宅だったため、一軒目に到着した際はショックを隠せなかったのが正直な感想です。以前ボランティア活動の一環で似たような訪問活動をした事がありますが、日本で豊かな環境に恵まれて育った私たちが想像出来ない光景でした。そのような環境で暮らす人たちはタイ国民全体の 11%で近年減少傾向にあるそうですが、それでもまだまだ大勢の人達が過酷な状況で生きている事実に、タイの医療関係者はもちろん、それを痛感する事が出来た私も、目を背けず自分の出来る事を考えなくてはいけないという気持ちになりました。



5. 自身のプログラム

タイに着いた初日に現地の教授に「明日、滞在中に自分のするプログラムを決めてもらいます」と告げられました。次の日、私のプログラムを世話して下さる教授の部屋で、あなたはどのような事に興味がある？どのような研究をしているの？と聞かれました。2年生だった私はまだ研究室に所属しておらず、まだ薬学固有の専門知識を詳しく学んでいない状態でしたが、前々から代替医療やハーブ治療にすごく興味を持っている事を伝えると「それじゃあ、タイハーブから薬をつくりましょう」と提案してくださいました。プロジェクトという言葉から大がかりな企画を想像されるかもしれませんが、私の場合、“実験内容の下調べ→予行実験→本実験→データ・結果まとめ→発表”という流れでした。そして、この中で一番大変だったのは最初のステップである“下調べ”でした。実験概要や手順、調整物質や薬の形を錠剤にすることは事前に教えていただけるのですが、実験の日までにそれぞれの調整物質の役割やこの手順の理由、そしてタイで使用するアメリカ薬事法(USP)に則った錠剤の正しい形・重さ・柔軟度・強度・溶解度などの項目を調べなければいけませんでした。調べるといっても、何十冊もある USPの中からまずどの冊子を見れば良いのか、そして1冊何千ページもある中からピンポイントで自分の必要な部分を見つけるのが一番大変でした。それでも、薬学部に入って初めて何かを1人でするといった機会だったので妥協したくはなく、時には夜寝る時間を惜しんで調べました。USP はもちろん英語での表記になりますが、今まで見たことないような薬学英语や医療英語がたくさん出てくるのです。分からない単語は後で調べて大体の概要を掴もうと最初は思いましたが、知らない単語だらけで埋め尽くされていることにすぐに気付き、関連していそうな部分は全て調べました。それでも結局1つの項目に関しての記事を見つける事が出来なかったため、日本に帰ってからたとえしばらくは使う機会がなくても、将来のために使い慣れしておく事と医療系の単語力の向上をはかろうと決心しました。

さて、今回私が製剤した錠剤ですが、主成分としてボラペットが含まれています。ボラペットとは、タイやインドネシアをはじめとした熱帯地域でよく育つ植物で、タイのハーブ製品にはよく使用されているためタイ人にとっては馴染みのある植物です。薬効として心肺機能の増強や血糖値の改善、肝機能の改善などがあげられます。授業外で大学の植物園にボラペットを確認しにいった時に、たまたまそこにいらっしゃった教授が「その植物を使って何かをつくるには、植物の事をよく知って自分の手で触って、その植物を感じてみなさい」とおっしゃって、私にボラペットを少しわけてくれました。口に含んでも大丈夫ということだったので、口に含んでみると、壮絶な苦味と日本人が一生かけても慣れないような酸味が舌に広がりました。持参していたジュースでも誤魔化しきれない後味に思わず笑みがこぼれましたが、教授がおっしゃったことは、薬用植物学を学ぶにあたって、初歩的だけど忘れがちなとても大事なことではないのかなと思いました。錠剤を製剤する際、時間がかかったのは機械の調整です。事前に調べてきた重

さや強度の規定の範囲に従って調整具合を変えるため、重さが良い具合に出来てもこのまま薬にすると固すぎて飲み込めない程固くなったり、逆にもろすぎて手で持った瞬間崩れてしまったりすることもありました。機械の調整を1日かけて行いました。担当してくださった教授と助手の方達は、私が1人でも全て出来るようになることを心がけてくれていました。実験当日は、とても落ち着いてやり遂げることが出来、結果も満足いくものとなりました。

そして、大学を去る1週間前に教授達の前で自身が取り組んだプロジェクトの発表がありました。自身の実験内容をパワーポイントでまとめたり、発表したりすることが今までなかったため、初めはどのように組み立てていけばいいのか迷いましたが、夜な夜な試行錯誤を繰り返し、納得のいくものを完成させました。人前で何かを話したり、発表したりすることはとても好きなのでプレゼンテーションは楽しく自分らしく出来ました。プレゼンを終えてから見に来てくださった教授全員に、良かった点と悪かった点を聞きました。「プレゼン自体はとてもナチュラルでフランク、そして興味を惹きつけるような話題や話し方だったため集中して見入っちゃったわ、でも、プレゼン内容や結果のまとめ方はまだまだだね。」とご指摘頂き、その後計1時間以上も改善方法を教えてくださいました。次の結果を発表する機会は研究室に所属してからになるかもしれませんが、今後に繋がるアドバイスを真摯に受け止めこれから生かしたいと思いました。



6. 授業外の過ごし方・アクティビティ

大学は都会から離れた田舎にあり、ほぼ全員が寮で生活しているため、多くの学生が土日になると親元へ帰ります。ラッキーなことに優しい友達のおかげで、今回私は5人の友達の家へ休日にホームステイすることが出来ました。自身で海外に行く時も、必ず1回は現地で出来た友達の家へホームステイさせてもらうことにしていますが、海外でのホームステイは、本当の現地の人の生活を知る一番簡単な方法だと思っています。タイの場合、家に大きな仏陀の像を置いていたり、ジュースだよといって生のココナッツを出してくれたりしました。植えられている植物や、朝ごはんに出てくる目玉焼きの味さえ違うのです。日中は私たちが行きたいといった有名なスポットへ家族が連れて行ってくれました。世界遺産に登録されている遺跡や、タイで有名なレディーボーイのショーなども見に行きました。旅行でタイに行くのと違い、現地の人達がお勧めするレストランや、観光ブックに載らないような食べ物を試せることが、外国に行くことの醍醐味だと思っている私にとって、決して忘れられない思い出となりました。



7. 終わりに

このプログラムのおかげで、大きく分けて2つの素晴らしいものを習得できました。まず、一番大きな習得は自信です。たかが1か月でどこから自信が沸くのかと、自惚れだと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、インターネットも十分に繋がらない、毎日とても暑いのにエアコンのない部屋・知らない言葉が飛び交う慣れない環境で、多忙なスケジュールを第二外国語だけでこなすことは、自然と私を強くしていきました。そして、英語力です。以前に外国へ同じ期間（1か月）語学留学したことがあるのですが、その時の1か月より英語を使いました。そのため、英語が話される国で語学学校へ通った1か月ではそこまでつかなかった英語力が、英語を母国語としないタイでついたので。外国へ語学留学する際は、自分で喋りに行くチャンスをつかんで積極的に話す

ことを意識しないといけませんが、今回はスケジュールが組まれていたため、受動的に、例え嫌でも英語を話さなくてはならない状況だったからだと思います。

このタイでの経験がきっかけとなって、現在学外で翻訳のお仕事をしたり、英語で開催される医療系講演会の翻訳をつくるお手伝いをしたりするようになりました。2年生の終わりに、少し出遅れたかもしれませんが、まずは第1のステップを踏めたと思っています。残りの学生生活で、言語を習得し、将来広い視野を持って幅広い選択が出来るようになるために、自己研鑽に励みたいと思っています。このような素晴らしい機会を提供して下さいありがとうございました。